

“If ever you prove false one to another”

Troilus and Cressida についての一考察

村上世津子*

(平成20年10月31日受理)

“If ever you prove false one to another”: A Study of *Troilus and Cressida*
Setsuko MURAKAMI*

Under the influence of feminism criticism, sympathy toward Cressida has increased. However, the traditional view that “Troilus is true and Cressida is false” still remains. Since Cressida’s betrayal of Troilus is performed in the full view of the audience, it is a fact which cannot be denied. Unlike Cressida, Troilus never loves any woman other than her. In this light the traditional view seems to be right. However, if “to be true to someone” means to be like a merchant “who, on finding one pearl of great value, went and sold all that he had and bought it,” Troilus’ truth becomes questionable. For he puts his reputation before his love when he is required to offer Cressida in exchange for Antenor.

Troilus and Cressida is not a drama about a true man and a false woman. Rather, it is a drama about a weak woman who cannot resist to be tempted by a gallant and a man who cannot become a first rate merchant. Incongruity between “if. . .another” and “let. . . panders” in Pandarus’ lines in Act three Scene two when Troilus and Cressida are preparing to go off to consummate their relationship makes us question the traditional view about Troilus and Cressida.

key words: Troilus, Cressida, true, false

はじめに

Troilus and Cressida を読んだときに腑に落ちない箇所があった。3幕2場で Troilus と Cressida の恋が成就して互いに相手への忠誠を誓った後で取り持ち役の Pandarus が2人の恋の証人として言う次の言葉である：

If ever you prove false one to another, since I have taken such pains to bring you together, let all pitiful goers-between be called to the world’s end after my name: call them all panders; let all constant men be Troilus, all false women Cressids, and all brokers-between panders.¹⁾

上に引用した Pandarus のセリフの最初の部分、すなわち “If” から “call them all panders”

* 英文学 准教授

には問題がない。しかし何故この後に “let all constant men be Troilus, all false women Cressids” が続くのか。この文の前提は “If ever you prove false one to another” である。この前提では不実を働く主体が Cressida だとは断定していない。Troilus かも知れないし Cressida かも知れないのだ。それなのに何故帰結部の後半に “let all constant men be Troilus, all false women Cressids” が続き得るのか。皮肉な解釈をするならばこの文は「不実を働く主体が Troilus であれ Cressida であれ『忠実な男はすべて Troilus, 不実な女はすべて Cressida』」と読めてしまう。この奇妙な引っかかりを感じながら *Troilus and Cressida* を読み直してみると、この引っかかりは単なる Pandarus の舌足らずな言い間違いによって生じたものと言うよりも Shakespeare の意図が滑り込ませられているように思える。本論文では “If ever you prove false one to another” で始まる文の帰結部の後半が “let all constant men be Troilus, all false women Cressids. . .” であることの中に Shakespeare のどんな意図がこめられているのか考察したい。

I.

Troilus と Cressida の人物評も近年はフェミニズム批評の影響を受けて Cressida に対する同情が募ってきている。伝統的解釈に挑戦する批評家としてはたとえば Asp は、“Troilus is a victim of his own self-deceit, which keeps him from seeing life as it is”²⁾と主張しているし、Jones-Davies も Mars と Venus のエンブレムの観点から “Troilus is not the perfect prince of chivalry”³⁾と主張している。また Labranche は Cressida と Hector や Cassandra との結びつき及び Troilus と Achilles との結びつきから “as true as Troilus” や “as false as Cressida” という一面的な人物の見方に疑問を呈している。⁴⁾Adelman は Cressida 弁護をさらに一歩進めて “the necessities of Troilus’ character, rather than of Cressida’s require her betrayal of him”⁵⁾とまで述べているし、Gaudet も “to read Cressida as a symbol of infidelity, to blame her in order to counter the subversive threat of the play’s nihilism, is an act of masculine scapegoating”⁶⁾と述べている。とは言え 3 幕 2 場の恋人たちの誓いの言葉通りに Troilus を “true” Cressida を “false” とする伝統的解釈も根強く残っている。伝統的解釈の立場を取る批評家としてはたとえば G. Wilson Knight は、トロイ側は “human beauty and worth”⁷⁾ギリシャ側は “bestial and stupid elements of man”⁸⁾を表すと考えるが、トロイ側の “human beauty and worth” の代表例の 1 つとして “the love of Troilus”⁹⁾を挙げている。同様に Nevill Coghill は “[Cressida] is designed to seem infinitely attractive to men, yet infinitely unworthy of the man with whom she is matched”¹⁰⁾と述べ、Bowden は “Troilus has become . . . the pattern of the true man”¹¹⁾と述べ、Morris は Troilus のことを “his nature is to love ‘not wisely but too well’”¹²⁾と述べている。同様に Knowland も “If anything kills Troilus’ love for Cressida, it is Cressida herself”¹³⁾と述べているし、Lawrence や Toole や Slight 也も伝統的な解釈をする。¹⁴⁾⁻¹⁶⁾

Troilus が忠実だというのは先に引用した 3 幕 2 場の Pandarus のセリフに先立って Troilus 自身が “I am as true as truth’s simplicity/ And simpler than the infancy of truth”(3. 2. 149-50)と主張しているし、それに何より Rowse を代表とする批評家たちに Shakespeare の見解の代弁者だと考えられている Ulysses が¹⁷⁾Troilus のことを “Not yet mature, yet matchless firm of word/. . . /They call him Troilus and on him erect/ A

second hope as fairly built as Hector”(4. 5. 97-109)と絶賛することに基づいている。Cressida についても同様である。3幕2場の Pandarus のセリフに先立ち Cressida 自身が “If I be false or swerve a hair from truth,/ . . . / . . . let them say to stick the heart of falsehood,/ ‘As false as Cressid””(3. 2. 164-75)と言っているし、ギリシャ陣営に連れて来られた Cressida のギリシャの將軍たちのあしらい方についての Ulysses の評価も Cressida 評に影響を及ぼす：“There’s language in her eye, her cheek, her lip,/ Nay her foot speaks, her wanton spirit looks out/ At every joint and motive of her body”(4. 5. 55-57)そして Ulysses の Cressida 評の正しさを証明するかのようこの劇の終わり近く(5幕2場)では観客が注視する中、舞台上で Troilus の眼前で Cressida が Diomedes に Troilus の形見の袖を差し出す。このように見えてくると Troilus と Cressida についての伝統的な評価は議論の余地がないように思える。しかしそう言い切って良いのだろうか。

Cressida が flirt であることを最初に指摘するのは Ulysses であるが、彼が Cressida についてこのような評価を下すのは彼が Cressida にキスを求めて断られてからである：

Ulysses: May I, sweet lady, beg a kiss of you?

Cressida: You may.

Ulysses: I do desire it.

Cressida: Why, beg then. (4. 5. 47-48)

そもそもこの場面で將軍たちからキスされることは Cressida が望んだことではなく Ulysses の発案によるものである。しかもこの場面を詳しく検討すると flirt だと言う Ulysses の言葉に反して Cressida は將軍たちのキスをかわそうと機知を使って必死の防戦をしていることがわかる。Cressida は Ulysses のキスの申し出を断るだけでなく Menelaus の申し出も断るのである：“The kiss you take is better than you give. Therefore, no kiss.” (4. 5. 38-39) Cressida は敵軍にあって敵の歓迎の意を装った欲情表現を敵のゲームのルールに則りながらも機知を使ってうまくかわそうとしているのである。最初に將軍たちにキスされはするがこの場面の Cressida の行動から彼女を flirt だと断じることができない。

II.

Cressida が flirt であるとする従来の説を崩すにはまだ最大の難問が残っている。この劇の終わり近くで観客が注視する中、Cressida が Troilus の形見の袖を Diomedes に与える場面をどうするかである。Troilus に見られているとはつゆ思わない Cressida と Diomedes は互いに相手に気のない素振りを示すことによって互いの気を引き合い Cressida については Diomedes に対する忠誠の保証として Troilus の形見の袖を Diomedes に与えてしまう。「これ以上確かな裏切りはない」ことは Thersites の指摘を待つまでもない。それを認めた上で Cressida には情状酌量の余地があることを考慮に入れなければならない。

Cressida が Diomedes に惹かれたのは「心が目に従った」ことが原因であることは Cressida 自身も認めている。しかし Cressida が置かれている状況が通常状況ではないことを忘れてはいけない。この劇の初めで Troilus と Cressida を結び合わせるために

Pandarus が奮戦して Troilus を持ち上げるときに Cressida は Hector を褒めたり Paris を褒めたり拳句は Achilles を Troilus より立派な男だと褒め上げたりするが、Cressida は決して彼らに惹かれているわけではない。*Romeo and Juliet* の初めで Romeo に一目惚れした Juliet が彼女の心を悟られずに乳母から Romeo の名前を聞き出すためにいきなり Romeo の名前を聞いたりせずに数人の興味のない人の名前を聞いてから Romeo の名前を聞くのと同様に Troilus の中に Pandarus の言葉を何千倍も上回る姿を見たから叔父に彼女の気持ちを悟られないようにするためにわざと関心のない人物の名前を口にしているのである。ギリシャ陣営に連れて行かれた Cressida がギリシャの高官たちの歓迎の意を装った愛情表現を彼らのゲームに則ってかわすことについてはすでに議論したとおりである。この2つの例から判断すると Cressida は決して生来浮気な女性なのではなく、父の裏切りによって恋人から引き離されて Antenor の代わりに捕虜としてギリシャ陣営に連れてこられ、頼る人もいない状況下で彼女の預かり主である伊達男に親切にしてもらったという特殊状況を考慮しなくてはならない。¹⁸⁾むしろ Cressida が本来は Troilus に忠実な愛を捧げていたことは Troilus と別れてギリシャへ行かなくてはならないことを聞かされたときの Cressida の嘆きの激しさからわかる。彼女にとっては Troilus が全てであり、Troilus と一緒にいるためなら父は捨てるし、Troilus から離れることはすなわち不実な女の権化になることだと主張する：

I will not uncle: I have forgot my father,
I know no touch of consanguinity,
No kin, no love, no blood, no soul so near me
As the sweet Troilus. O you gods divine,
Make Cressid's name the very crown of falsehood
If ever she leave Troilus. (4. 2. 93-98)

III.

一方 Cressida と別れなくてはならなくなったことを知ったときの Troilus の反応はどうだろうか。Aeneas から Antenor と引き換えに1時間以内に Diomedes の手に Cressida を引き渡さなければならなくなったことを聞かされたときに Troilus は実にそっけない反応をする。Troilus は一言 “Is it so concluded?” (4. 2. 66)と聞くだけである。そしてあたかも Cressida との別れよりも Cressida のところに来ていたことがバレることの方が問題であるかのように Aeneas に “We met by chance—you did not find me here” (4. 2. 71)と口止めする。Cressida に別れの話を持ち出す時にも Troilus と Cressida の反応には温度差がある。Cressida の嘆きはトロイや Troilus の元を去らなければならないことに存在し、それが避けられない事実であるのか執拗に尋ねる：

And is it true that I must go from Troy? (4. 4. 29)

What, and from Troilus too? (4. 4. 30)

Is't possible? (4. 4. 31)

I must then to the Grecians? (4. 4. 55)

それに対して Troilus は Cressida との別離そのものに対しては何の不満も抱かない。彼の心配はギリシャ方に行った Cressida が不貞を働かないかという 1 点に集約されていて執拗なまでに “true” を連発する。

“be thou but *true* of heart” (4. 4. 57 筆者強調)

I speak not “be thou *true*” as fearing thee

.....
But “be thou *true*” say I to fashion in

My sequent protestation: be thou *true*

And I will see thee. (4. 4. 61-66 筆者強調)

Troilus と Cressida の別離に対する温度差の原因を性差に求めることができるかもしれない。たとえば *Julius Caesar* の中で Caesar は一旦は Calphurnia の夢のお告げに従って元老院に行かないと決めるが、迎えに来た Decius にもし行かなければ “Lo, Caesar is afraid”¹⁹⁾ という噂を呼ぶと指摘されると妻の忠告を振り切って出かける。*Troilus and Cressida* の中でもこの劇の終わり近くで Hector は Cassandra の哀願を振り切って出陣する。とは言え、男性が別離を不可避なものとして受け止め女性は何とか男性と一緒にいたいと思うと決まっているわけではない。Tybalt を殺して Verona から追放の宣告を受けた Romeo は Juliet と別れなければならないことを悲嘆して次のように言う：“’Tis tortures, and not mercy. Heaven is here/ Where Juliet lives. . . / . . . /and sayest thou yet that exile is not death?”²⁰⁾ また *Othello* の中では Desdemona が夫に同行して自分も戦地に行きたいと Duke をお願いするときに Othello も Duke に彼女の同行の許可をお願いしている。さらには *Antony and Cleopatra* の中でも Cleopatra の恋の虜になっている時に Antony は次のように言う：“Let Rome in Tiber melt, and the wide arch/ Of the ranged empire fall! Here is my space!”²¹⁾

Troilus and Cressida の世界の登場人物が恋人たちの別離について特異な反応を示すわけではないことは Aeneas から Cressida を Diomedes の手に引き渡さなければならなくなつたことを聞かされたときの Pandarus の嘆きの激しさによって示唆されている：

“Is't possible? No sooner got but lost? . . . The young prince will go mad. . . .”

(4. 2. 74-75)

“. . . would thou hadst ne're been born! I knew thou wouldst be his death.”

(4. 2. 83-84)

“Thou must be gone. . . ; ’twill be his death, ’twill be his bane, he cannot bear it”

(4. 2. 88-90)

なるほど Pandarus は Troilus と Cressida の恋の仲介者であり Troilus と Cressida の別離により彼の仲介の労が無に帰すのを嘆くのは当然かもしれない。しかし Pandarus の嘆きの内容を仔細に検討すると、彼は自分の努力が徒勞であったことを悔しがっているのではなく Cressida との別離の悲しみはあまりにも大きすぎてとても Troilus に耐えられるものではないから Troilus が自暴自棄に陥りそれが彼の破滅の元になることを嘆いているのである。換言するならば Pandarus は Troilus が Cressida との別れを甘受できないのは当然だと考えているのである。そして Pandarus のように嘆きはしないが愛の何たるかを知っている Paris は Troilus の置かれている状況に同情する。

約束通り Cressida を Diomedes に引き渡した後で Troilus ら一行は戦場に急ぐが、トロイア戦争のそもそものことの起こりは “a whore and a cuckold”(2. 3. 64)である。当然のことながらそのような戦争の大義名分は疑わしく戦争続行の理非が問題になる。その問題について議論する席上で Troilus と Paris は「道理ばかり主張したら、勇猛心も名誉心も萎える。Helen は王たちが商人よろしく彼女を求めて海に乗り出す真珠である。道理や道徳やその他一切の算盤勘定を度外視して類まれな美人を守るために敢然と戦うことこそ武人として生まれたものの誉れだ、値はこっちがつけるんだ」と熱弁を奮って、Helen を返すのが道理であると主張していた Hector を翻意させる。

Paris とともに「恋人を守るために戦うことこそ武人の務め」と喝破する Troilus が何故彼自身の恋人を犠牲にしてまで他者の恋人のために戦うのだろうか。1つの答えは Helen を返しさえすればこれまで払ってきた損失や犠牲を帳消しにする用意があるというギリシャ方の提案を蹴った今となつては、もはや後戻りできないからだろう。戦争続行を決議したときと異なりトロイ方は知将 Antenor を捕虜にとられている。Antenor は「トロイの国政の要」であるからトロイ方としては Antenor と Cressida の交換というギリシャ方の提案を受け入れざるを得ない。Troilus は Cressida と一夜を過ごすためにその決議の場を欠席していたし Cressida が彼の恋人であることを公にしていけないので決議された以上、その決定に従うのが道理である。しかしそう言い切って良いのだろうか。

IV.

この劇の中では Paris と Helen、Troilus と Cressida の恋が前景で提示されているだけでなく Achilles と Polyxena の恋にも言及されている。ギリシャ方ではこの劇の最初からギリシャ軍の “the sinew and the forehand”(1. 3. 144)である Achilles が参戦せずにテントの中にこもっていることが問題になる。Achilles が名声に溺れて高慢になりテントの中にひきこもってギリシャ軍の作戦を嘲笑い、時には総指揮官である Agamemnon の真似まで演じたりしているので序列がなおざりにされて上の者が下の者に侮られて大混乱が生じている。トロイは自身の力で立っているのではなくギリシャが大混乱し、熱病にかかっているから立ってられるのだというのが Ulysses の見立てである。そしてギリシャが熱病にかかっている原因は Achilles の高慢にあるのだから高慢には高慢をもって対処するのが良いというのが Ulysses の処方である。Ulysses の処方はある程度は功を奏する。Achilles は彼

を見るギリシャの諸侯たちの目つきが変わったことにすぐ気がつく。そして Ajax が Hector の挑戦に応じて Hector を打ち倒したら Achilles の reputation が手ひどい傷を受けることを気にする：“I see my reputation is at stake./ My fame is shrewdly gored.”(3. 3. 228-29) しかし Achilles は彼の reputation が危うくなっていることを気にしながらも態度を改めようとはしない。ギリシャ全軍が頭を下げて頼んでも不貞寝を決め込んでいた Achilles は Hector と Ajax の決闘後ギリシャ陣営で Hector 本人に直に戦場での戦いをお願いされたときに始めて参戦する決意をする：“Tomorrow do I meet thee fell as death.”(4. 5. 269) だが、恋人の Polyxena から愛のしるしが、また彼女の母の Hecuba から手紙が届き彼が立てた誓い すなわち Polyxena を恋人として与える見返りとして彼自身が参戦しないだけでなくギリシャ軍に攻撃をやめるように説得するというものを守るようにとやってくる。 Achilles の決意はたちまち揺らぐ：“Fall Greeks, fail fame, honour or go or stay./ My major vow lies here”(5. 1. 40-41) 結局、最終的に Achilles の “drowsy blood” を覚醒して彼を出陣させるのは彼の元に運び込まれた男妾の Patroclus の死体と Hector に復讐を誓いながら戻ってきた鼻を削がれ、手足を失った Myrmidons たちの無残な姿である。

“vice of mercy”を持ち合わせていて敵にも哀れみを掛ける Hector と異なり、Achilles は冷徹である。4 幕 1 場でギリシャ方に招待されたトロイ方がギリシャ陣営に行ったときに Achilles はトロイ軍一行を歓迎するための宴を催そうとしていることなどまったく意にも介さず、Hector を前にして無礼にもどこを狙えば Hector を打ち倒すことができるのか教えてくれと神々に懇願する。歓迎の宴を開こうとするときでさえ平然と無礼を働くので戦場で Hector と対峙したときに Achilles が対戦相手に対する礼儀や憐れみなど一顧だにしないことは当然である。 Achilles は “I am unarmed, forgo this vantage”(5. 9. 9) と言う Hector の懇願に耳を貸さず、丸腰の相手を武装した部下たちに惨殺させる。

これほど非情に徹することができる武将をして何故 Shakespeare は Hecuba への誓い故に高慢のそしりを受け reputation が危うくなってもテントで不貞寝して出陣させなかったり Hector と仇敵として戦場で戦うことを約束した後でも戦意を喪失させたりするのだろうか。 Shakespeare の *Troilus and Cressida* の材源である Caxton の中では Achilles が Hecuba に誓いを立てるのは Hector の死後である。²²⁾ Shakespeare は何のためにその時期を早めたのだろうか。 Achilles の Polyxena への恋は Troilus と Cressida の関係をどのように照射するのだろうか。

V.

Troilus と Helen の別離についての反応の違いに戻ろう。 Cressida との別れを唯々諾々と受け入れる時に Troilus は決して Cressida が嫌になったわけではない。それは Cressida が生まれながらにして愛の技巧に長けているギリシャの青年将校たちに囲まれて心変わりしないか心配し “true” という言葉を何度も連発することから明らかである。しかも Troilus はただ単に「心変わり」を心配するだけでなく心変わりしなければ危険に身をさらして会いに行くと約束しさえする。それを認めた上で何故 Troilus がそんなにもやすやすと Cressida との別離を受け入れるのかという疑問が残る。

1 つの答えは “true/ false” についての Troilus と Cressida の考えの違いに求められるかもしれない。 Troilus と別れて Antenor の代わりにギリシャに行かなくてはならなくなった

ことを Pandarus から聞かされた Cressida は “O you gods divine,/ Make Cressid’s name the very crown of falsehood/ *If ever she leave Troilus*”(4. 2. 96-98 筆者強調)と言う。彼女にとって “true”であるとは Troilus のそばに在ることであり, “false”は Troilus から離れることである。それに対して Troilus にとって Cressida が “true”であるとは彼女が他の男性に心を奪われずに彼だけを愛することであり, 物理的に離れていることと “true”であることは両立可能である。このように2人の “true”に対する考え方が異なっているから Troilus が彼の “true”についての考えに基づき別れても “true”であってくれと繰り返すのを聞いて Cressida が Troilus は彼女のことを愛していないと感じるのも仕方のないように思える。だがはたして Cressida が Troilus に愛されていないと感じるのは本当に彼らの “true”についての概念の相違に由来するのだろうか。

Cressida に “you love me not”(4. 4. 81)と言われた Troilus は彼が Cressida に “true”であれとしつこく言うのは決して彼が Cressida のことを疑っているからではなくて彼自身の “merit”(4. 4. 84)を疑っているからだと答えてそのセリフを “be not tempted”(4. 4. 90)で締めくくる。Troilus の答えに納得できない Cressida は「私が誘惑されると思うのか」と聞き, Troilus はさらに弁明を繰り返すだけである。Troilus がどんなに言葉を弄してもつまるところ彼は彼女のことを疑っているだけだと感じる Cressida は今度は彼が連発している “true”という言葉が彼女が Troilus に向けて使う: “My lord, will you be true?”(4. 4. 100) Troilus は Cressida の問いに他者が技巧を弄して名声を吊り上げるときに自分は “great truth”で “mere simplicity”しかつかむことができないと答える。しかしそもそも Cressida が “My lord, will you be true?”と聞くのは, Troilus の説明を聞いても自分が本当には愛されていないと思う Cressida の気持ちが満たされることはないからである。Cressida は Troilus の態度のどこに不誠実な臭いを嗅ぐのだろうか。

Troilus は Helen をギリシャ方に返すべきか否かを議論する席上で Paris とともに「類まれな美人のために戦うことこそ武人の誉れであり, 算盤勘定をして戦争続行の理非を決めるのは卑しいことだ」と主張した。しかし物理的に離れていても互いに “true”であり得るという Troilus の主張が正しいなら多大の犠牲を払ってまで Helen をトロイに置いておくことの意味がなくなる。この劇の冒頭で Troilus が Cressida に恋焦がれていてまだ Troilus と Cressida の恋が成就していないときに Troilus は忌々しく思いはしても Pandarus の手を借りて Cressida のそばに行きたいと思った。Cressida のそばに行きたいという気持ちがあまりにも強いので自然な出会いの機会を待つことはできないし, ましてや Cressida が父親についてギリシャ方に行けば良かったのという Pandarus の意見に承服できなかったのは当然である。Antony や Paris や Romeo ら他の Shakespeare 劇に登場する人物たちと同様に Troilus も本当に恋しているときには万難を排して恋人のそばにいたいと思うのである。

恋人のそばに在ることと “true”であることとの関係だけではない。この劇の最初で Troilus が Cressida に恋焦がれていたときに Troilus は再三, 彼自身の心の中に残酷な戦争があるときに城の外で戦わなければならない理由などない, そんな貧弱な大義名分のためには戦えないと言っていた:

Why should I war without the walls of Troy

That find such cruel battle here within? (1. 1. 2-3)

I cannot fight upon this argument,

It is too starved a subject for my sword. (1. 1. 86-87)

この劇の初めでも 2 幕 2 場で戦争続行の理非を議論するときでも 4 幕 4 場で Antenor と引き換えに Cressida を捕虜としてギリシャ方に差し出すときでも戦争の大義が Helen にあることに変わりはない。それなのに何故戦争に参加することについての Troilus の意識に変化が見られるのだろうか。

Troilus は一方では Cressida のことを愛し続けているが、他方では Cressida に対する愛は軍規を乱さない範囲にとどまっている。なるほど Troilus はギリシャに行ってしまった Cressida が心変わりしないか非常に心配する。しかしだからと言って軍の決議に異を唱えてまで Cressida を自分の手元において置こうとはしない。むしろ Troilus は会議をサボって Cressida のところにいたことがバレて reputation を汚すことのほうを恐れている。なるほど Cressida を愛しているから Diomedes が Troilus の懇願故ではなく Cressida 自身の美しさ故に彼女の恋の僕になると言明すると、高言故に戦場では容赦しないと宣言する。しかし容赦しないというのはあくまで戦場で Diomedes と対峙したときのことであり、軍規を無視してその場で Diomedes に決闘を申し込むような愚行には出ないのである。3 幕 3 場で Polyxena に恋をした Achilles が reputation か恋人への誓いかの選択を迫られたときに出陣せず惰眠をむさぼってれば彼の reputation が手ひどい傷を受けることを気にしつつも恋人への誓いを優先するのと対照的である。しかも Achilles はこの劇の終わり近くで明日戦場で Hector の相手をするを約束した後でさえも恋人とその母から誓いを思い出させられると “Fall Greeks, fail fame, honour or go or stay./ My major vow lies here”(5. 1. 40-41) と言う。Antenor と引き換えに Calchas の元に行かなくてはならなくなったことを聞かされたときに Cressida が父のことは忘れたし、肉親とも思っていないから父の元になんか行かないと叫んだことについてはすでに議論した通りである。軍規を乱さない範囲で Cressida を愛する Troilus の愛し方を見て Cressida が Troilus に愛されていないと感じるのは恋人への愛を第一に考える Achilles や Cressida 自身の愛し方と対照的に 4 幕 4 場での Troilus の愛し方は彼の reputation が第一であり、Cressida への愛はその次にくるからである。

VI.

Cressida の裏切りの場面に戻ろう。Ulysses に連れられて Calchas のテントに行った Troilus は Cressida がなかなか Diomedes に約束した保証の品を渡さず相手をじらすことによって相手の欲情を煽り立てた上で Diomedes に Troilus の形見の袖を与えるのを見る。形見の品を差し出した後でもまだ Troilus への思いが残っている Cressida は、いったんは約束を守らないと言うものの馬鹿にされるのが嫌な Diomedes が Cressida の言葉に腹を立てて彼女の元から立ち去ろうとすると慌てて前言を撤回する：“Ay, come, O Jove!—do come—I shall be plagued.”(5. 2. 104)彼女のこの言葉は解釈しにくい Dawson が指摘しているように Diomedes との逢引が彼女に痛みをもたらすであろうことを Cressida が認識

していると解釈することができる。²³⁾Diomedes が退場した後 Cressida は次の独白をして彼女も退場する：“Troilus farewell, one eye yet looks on thee,/ But with my heart the other eye doth see.”(5. 2. 106-107)この独白は Troilus への別れの言葉で始まっているが、Dawson が指摘するように別個の対象物に焦点を合わせられた目は相反する感情を示唆し得る。²⁴⁾形見の品を差し出し、逢引の約束をし、Troilus に別れの言葉も述べているのだからこれ以上確かな証拠がないことは Thersites の指摘を待つまでもない。しかもこれは舞台上で観客の眼前で演じられるのだから Cressida の裏切りは事実として観客の脳裏に刻み付けられる。しかし “I shall be plagued”という言葉が示唆する痛みの自覚と “one eye yet looks on thee”という言葉は Diomedes に惹かれつつも Cressida の心の中にはまだ Troilus への未練が残っていることを示唆している。

Cressida の裏切りの現場を終始目撃した Troilus は地獄の責め苦しむ。乱心の瀬戸際まで行った Troilus は Cressida と Diomedes が退場した後もすぐにはその場を立ち去ることができない。あまりにもショッキングな事実を目撃した Troilus は何とかして事実を彼の受け入れやすい形に作り直そうとする。彼はまず Cressida はいなかったと思込もうとする。いたということが否定し得ない事実であると悟ると今度は Cressida を天に誓った絆によって Troilus と結ばれた美しくて神聖な存在と、その絆が解かれて人間の5本の指によって結ばれた絆によって Diomedes に与えられた過食された誓約の脂ぎった残り物としての存在に分ける。そして “This is and is not Cressid.”(5. 2. 145)という有名なセリフを吐く。Troilus のこのような一連の試みは彼の愛する穢れなき Cressida のイメージをなんとか保持しようとする試みであり、彼が Cressida のことを一途に愛してきて、今も愛しているからこそその反応であるように思われる：

never did young man fancy
With so eternal and so fixed a soul.
Hark Greek, as much as I do Cressid love,
So much by weight hate I her Diomed. (5. 2. 164-67)

しかし Troilus が主張するように今も Cressida のことを愛しているのなら何故彼の目の前で Cressida が裏切るのを忍耐強く目撃していないで飛び出していった彼女の横顔を張るとか Diomedes に決闘を申し込むとかしないのか。なるほど “as much as I do Cressid love,/ So much by weight hate I her Diomed”の後には “that sleeve is mine that he'll bear in his helm:/ Were it a casque composed by Vulcan's skill,/ My sword should bite it”(5. 2. 168-70)が続く。しかし Troilus の剣がいつ Diomedes の胃を切りつけるかといえば明日戦場で出会った時にである。Cressida を Troilus の Cressida と Diomedes の Cressida に分けて “This is and is not Cressid.”と言う考え方は “one eye yet looks on thee,/ But with my heart the other eye doth see,”に呼応するものである。Cressida が Troilus を裏切ったことは否定しようもない事実であるが、一方では Cressida は Troilus を裏切るまさにその時でさえも Troilus に未練を残している。戦争続行の是非を議論する会議の席上で Troilus は「Helen の値はこっちがつけるんだ」と主張した。それなのに何故 Cressida を取り戻せるか永遠に失うかの瀬戸際に立たされている今、同じことを叫ばないのか。もし Troilus が

おとなしく目撃していないで飛び出して行ったなら彼女の心を取り戻すことができたであろう。

Troilus が Cressida の裏切りを目撃し地獄の責め苦を味わわされている間、Ulysses は彼の傍らにいて Troilus の感情が激するたびに Troilus は危険なギリシャの陣営の中にいることを思い出させる。危険を思い出させられるたびに Troilus は忍耐力を発揮して激した感情を抑える。Troilus は誠に分別のある振る舞いをする。だがこれは別の見方をするならば Troilus は Cressida を取り戻せるか否か土壇場に置かれたときでさえ、分別の規を超えない、安全圏に身を置いた行動しかとらないことを意味する。分別の枠内に収まった Troilus の行動を Helen を返すことの理非についての会議での “Reason and respect/ Make livers pale and lustihood deject.”(2. 2. 49-50) という主張に照らし合わせて判断するならば Troilus の愛の限界が浮かび上がる。

VII.

この劇の初めて Cressida に恋している Troilus が彼女のところに行くために Pandarus に仲介を頼まなければならなかった時に Troilus は彼と Cressida と Pandarus の関係を次のように描写した：

Her bed is India, there she lies, a pearl;
Between our Ilium and where she resides
Let it be called the wild and wand'ring flood,
Ourself the merchant and this sailing Pandar
Our doubtful hope, our convoy and our bark. (1. 1. 94-98)

Troilus and Cressida 中での真珠の譬えの意義を印象付けるために Shakespeare は 2 幕 2 場の Helen を返すべきか否かについてのトロイ軍の会議の中でも Troilus にその比喻に言及させている。：“Why, she [Helen] is a pearl/ Whose price hath launched above a thousand ships/ And turned crowned kings to merchants.”(2. 2. 81-83) これらのセリフの背後にマタイの福音書 13 章 45-46 節にかけての次の言葉が響いていることは多くの批評家の指摘するところである：「また天の御国は良い真珠を捜している商人のようなものです。すばらしい値打ちの真珠を 1 つ見つけた者は行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。」Kaula と Langman は、Troilus のセリフの背後に存在する宗教的な響きは Troilus が Hector の言う “mad idolatry” を犯していることを示唆していると述べている。²⁵⁾⁻²⁶⁾Dusinberre も同様の意見で “In *Troilus and Cressida* beauty translated into the form of the beautiful maiden must, like Helen and Cressida, come to dust.”²⁷⁾と述べている。“pearl” や “merchant” の言及をこの劇に多用されている金銭的な用語と結び付けて考える批評家もいる。たとえば Tylee は “Cressida is truck for barter, without rights. . . . Women, prized solely as untainted, painted flesh, have no other worth.”²⁸⁾と述べ、Bevington も “male ownership and a transfer of the woman as property”²⁹⁾に言及している。さらに Barfoot は “in love relationships the use of the language of trade is bound to cast a venal shadow on the heart and passions”³⁰⁾と述べている。

しかしマタイの福音書のエコーは愛する価値のないものを愛した Troilus の愚かさをアイロニカルに照射しているのでも Cressida にモノとしての価値しかなく 1 個の人格を持った存在として認められていないことを示唆しているのでもない。背後に存在するマタイの福音書の響きから商人である Troilus には真珠である Cressida を手に入れるために全財産を投げ打つことが求められている。しかし Troilus は Cressida との恋が成就した直後に運命のいたずらで Antenor と引き換えに Cressida を差し出さなければならなくなったときに全てを投げ打ってまで彼女を手元に置いておこうとはしない。Priam 王子にしてトロイ軍の武人である Troilus にとっての最大の関心事は “a second hope as fairly built as Hector”(4. 5. 109) という reputation を保つことであり、そのためには武人としての職務と私事が対立した場合には職務を優先させなければならない。もし Troilus が恋を選んでいたら戦場に姿を見せずテントの中でふて腐れていた Achilles と同様 非難されて reputation を失ったであろう。Troilus は誠に賢明な選択をする。しかし reputation を失ってもなおかつ恋に徹することができたならば Romeo や Antony や Othello のような恋の殉教者の高みに昇ることができただろう。reputation か恋かの選択を迫られたときに reputation を選ぶ Troilus は全財産を売り払ってすばらしい値打ちの真珠を買う商人になることができない。

結び

フェミニズム批評の影響を受けて近年は Cressida に対する同情が集まってきているが一方では「誠実な男は Troilus ,不実な女は Cressida」という従来解釈も根強く残っている。Cressida の裏切りは Troilus と Cressida の眼前だけでなく舞台上で観客の眼前で演じられるので疑いようのない事実である。他方、Troilus が Cressida 以外の女性に心を奪われることは一度もない。だから「誠実な男は Troilus ,不実な女は Cressida」という解釈は妥当なように思える。しかし、人を愛し、その人に誠実であることが「すばらしい値打ちの真珠 1 つ」を手に入れるために「持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまう」商人のようにその人に対する思いを最優先することであるならば Troilus の誠実には疑問符がつく。Antenor と引き換えに Cressida を差し出さなければならなくなったことを知ったときに Troilus は “a second hope as fairly built as Hector” という reputation を犠牲にしてまで Cressida を手元に置いておこうとはしないからである。Troilus は決して悪人ではないし彼なりに恋が成就した後も恋人のことを思い続ける。しかし彼は一流の商人にはなれないから「すばらしい値打ちの真珠」を手にするにはできない。

Troilus and Cressida は不実な女(Cressida)と誠実な男(Troilus)の悲恋についての話ではない。昔の恋人に未練を残しつつも目の前にいる男性の誘惑に抗いきれない弱さを持った女と一流の宝石商になりきれない男の悲恋についての劇である。Troilus と Cressida の恋の取り持ちの Pandarus のセリフの中に忍び込まされている “If ever you prove false to one another. . .” で始まる文の “if” から “one another” までの前提と “let” から最後まで帰結の結びつきの悪さは「Troilus は誠実で Cressida は不実」という従来 Troilus と Cressida 観に疑問を投げかけさせるきっかけとなる。

注

- 1) William Shakespeare, *Troilus and Cressida*, ed. Anthony B. Dawson, The New

Cambridge Shakespeare (Cambridge: Cambridge UP, 2003) 3 幕 2 場 178-82 行 . テキストはこの版を使用した . 以下このテキストからの引用はすべて本文中に幕 , 場 , 行を記すにとどめる .

2) Carolyn Asp, “Th’ Expense of Spirit in a Waste of Shame,” *Shakespeare Quarterly* 22 (1971): 357

3) M. T. Jones-Davies, “Discord in Shakespeare’s *Troilus and Cressida*; or, The Conflict between ‘Angry Mars and Venus Queen of Love,’” *Shakespeare Quarterly* 25 (1974): 40

4) Linda Labranche, “Visual Patterns and Linking Analogues in *Troilus and Cressida*,” *Shakespeare Quarterly* 37 (1986): 450

5) Janet Adelman, “‘This Is and Is Not Cressid’: The Characterization of Cressida,” *The Mother Tongue: Essays in Feminist Psychoanalytic Interpretation*, ed. Shirley Nelson Garner, Claire Kahane, Madelon Sprengnether (New York: Cornell UP, 1985)137.

6) Paul Gaudet, “‘As True as Troilus,’ ‘As False as Cressid’: Tradition, Text, and the Implicated Reader,” *English Studies in Canada* 16 (1990): 125

7) G. Wilson Knight, *The Wheel of Fire: Interpretations of Shakespearian Tragedy* (1930; London: Methuen, 1983) 47.

8) Knight, 47.

9) Knight, 47.

10) Nevill Coghill, *Shakespeare’s Professional Skills* (Cambridge: Cambridge UP, 1964) 109.

11) William R. Bowden, “The Human Shakespeare and *Troilus and Cressida*,” *Shakespeare Quarterly* 8 (1957): 177

12) Brian Morris, “The Tragic Structure of *Troilus and Cressida*,” *Shakespeare Quarterly* 10 (1959): 491

13) A. S. Knowland, “Troilus and Cressida,” *Shakespeare Quarterly* 10 (1959): 354

14) William Witherle Lawrence, *Shakespeare’s Problem Comedies*, 2nd ed. (1931; New York; Frederick Ungar, 1960) 142.

15) William B. Toole, *Shakespeare’s Problem Plays: Studies in Form and Meaning*, *Studies in English Literature* 19 (Hague: Mouton, 1966) 211.

16) Camille Slights, “The Parallel Structure of *Troilus and Cressida*,” *Shakespeare Quarterly* 25 (1974): 47

17) A. L. Rowse, *William Shakespeare: A Biography* (London: Macmillan, 1963) 342.

18) Gayle Greene, “Shakespeare’s Cressida: ‘A Kind of Self,’” *The Woman’s Part: Feminist Criticism of Shakespeare*, ed. Carolyn Ruth Swift Lenz, Gayle Greene, and Carol Thomas Neely (Illinois: U of Illinois P, 1980) 144.

19) William Shakespeare, *Julius Caesar*, ed. David Daniell, *The Arden Shakespeare* (Croatia: Thomas Nelson, 1998) 2 幕 2 場 101 行.

20) William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, ed. Brian Gibbons, The Arden Shakespeare (1980; London: Routledge; 1992) 3 幕 3 場 29-43 行.

21) William Shakespeare, *Antony and Cleopatra*, ed. John Wilders, The Arden Shakespeare (London: Routledge, 1995) 1 幕 1 場 34-35 行.

22) Anthony B. Dawson, notes, *Troilus and Cressida*, by William Shakespeare, The New Cambridge Shakespeare, 202.

23) Dawson, 210.

24) Dawson, 210.

25) David Kaula, "Will and Reason in *Troilus and Cressida*," *Shakespeare Quarterly* 12 (1961): 274

26) F. H. Langman, "Troilus and Cressida," *Jonson and Shakespeare* ed. Ian Donaldson (London: Macmillan, 1983) 72.

27) Juliet Dusinberre, "*Troilus and Cressida* and the Definition of Beauty," *Shakespeare Survey* 36 (1983): 88

28) Claire M. Tylee, "The Text of Cressida and Every Ticklish Reader: *Troilus and Cressida*, The Greek Scene," *Shakespeare Survey* 41(1989): 64

29) David Bevington, introduction, *Troilus and Cressida*, by William Shakespeare, The Arden Shakespeare (1998; London: Thomson, 2004) 50.

30) C. C. Barfoot, "Troilus and Cressida: 'Praise Us As We Are Tasted,'" *Shakespeare Quarterly* 39 (1988): 47